

ITL NEWS

No.43

まえがき

R2020 後半期の重点的基本課題に挙げられた「学生が自ら課題を設定し、主体的に学ぶ力の形成」の実現のために、自ら「問い」を立て、論理的思考力と探究心を養うことが急務になっています。そして、学問分野を問わず、学びの質的転換を促すための基礎となるのは、思考のプロセスを明確に表すためのライティング力です。立命館大学では多くの学部で初年次教育として意欲的なライティング指導が行われ、アドバイジングも充実してきていますが、学生の「論理的に書く力」には、日本語、英語を問わず課題が多く見られます。

今年度第1回の教学実践フォーラムは、全学的なライティング指導の可能性と課題を掘り起こし、高大連携、初年次教育の観点を考慮に入れて、日本語と英語という言語の壁を超えた指導のあり方を考える機会としました。このITLニュースでは、強い問題意識を持っておられる2人の登壇者の発表と3学部の実践の報告とともに、議論の要旨をご紹介します。

2019年度
第1回教学実践フォーラム

2019年8月5日(月)
13時00分～15時30分

「論理的思考力・探究心」を育てるアカデミック・ライティング
— 言語の枠を超えた「書く」指導のあり方 —

＜目的＞
言語の枠を超えたライティング教育に関わる全学の教員が一同に会し、ともに授業を作っていくために意見交換し、日本語、英語という言語に囚われない新しいライティング教育のあり方、双方の教員の協力関係の構築の可能性を探ることを目的とする。

＜主な議題＞
1. 日本語と英語のライティング指導のつながりについて
2. リテラシー改革を視野に入れた、初年次教育のあり方について
3. 高等教育の日本語・英語ライティング指導の現状
4. ライティング指導の必要性と授業に生かす方法について

主催 立命館大学 教育・学術支援センター

会場 立命館大学

TwoX2
ひびこ・ひびこキャンパス 会館
おぎのやキャンパス 3F
小瀬キャンパス 3F
中央キャンパス 601
立命館アジア太平洋大学 A棟3F 第5会議室

登壇者
山下 美朋 (立命館大学 生命科学部 准教授)
澤井 達正 (立命館大学 教育開発推進機構 教授)
山岡 聖史 (立命館大学 教育開発推進機構 教授)

司会 沖 裕貴 (立命館大学 教育開発推進機構 教授)

お問い合わせ先
立命館大学 教務課 Tel: 075-455-8804
Mail: 167@ednet.ritsumeikan.ac.jp

「論理的思考力・探究心」を育てるアカデミック・ライティング
— 言語の枠を超えた「書く」指導のあり方 —

生命科学部 准教授 山下 美朋

私は英語教員として、また個人の関心から「英語で論理的に書けるようになる」ための研究や指導を行ってきました。論理的な英文は、1) パラグラフで構造化されている、2) 論が一貫しており、適切なつなぎ言葉がある、3) 読み手を意識した書き方である、と言われています。しかし、それらを指導しても学生の英文の多くは、これらの要件を満たさず、特にパラグラフの概念や客観的な視点がなかなか定着しません。作者の思いや経験を綴るとされる、日本語の作文を書く思考で書かれた英文が多く、筆者の研究やフォーラムに先駆けて収集されたアンケートから、多くの学生に英文を書く指導や経験が十分でないことが原因であると示唆されました。大学入学前までのパラグラフ・ライティングの教育、そして“実際に書かせる”訓練が欠かせず、そのためには高大連携の指導体制と教員間の協力が必要です。また、高校生と大学生に英文を書かせ、大量にデータを集積し、レベル毎の適正な評価基準を作成したり、指導内容を明確にすることも



非常に重要です。現在は同一基準で評価されている学生が、個々の能力に応じた目標を持てるようにしたいものです。

また、昨今では、英語と日本語のライティングの指導が近似してきており、双方の指導における有機的なつながりを構築することも必要だと考えています。例えば、日本語のレポート課題の指導の際に、パラグラフを基準とした書き方や、英語の方で重視される重点先行型の論理展開が教えられています。また学生のレポートに散見される問題は、英文を書く際にも顕著であるため、問題点の共有と原因究明が双方の教員の協力のもとでなされるべきでしょう。その意味においては、学部毎に展開しているライティング授業においても問題を共有し、より全学的な視野での指導がなされるべきであると私は強く感じています。

生命科学部では、プロジェクト発信型英語プログラム（通称 PEP）を展開しており、学生たちは「興味・関心に基づきプロジェクトを立ち上げ実行し、英語で発信すること」が求められています。この授業のもとで 2017 年度より、院生が学部生の課題の相談に対応する、正課外のライティング支援「SAPP」(Support for Academic Projects and Papers) を始めました。まだ小規模ではありますが、気軽に相談できる TA チューターの存在は大きく、年々学部生の利用は増えています。ライティング支援において、アカデミック・ライティングと専門科目の両方の知識を備えた TA チューターの確保や養成が欠かせません。また書いたものを添削するのではなく「書き手を育てる」視点も重要です。全学的なライティング支援を望む一方で、学部毎の要求に応じた支援や体制、そのための議論が今後も行われることを期待しています。

日本語ライティングと高大接続

教育開発推進機構 教授 薄井道正

今回のフォーラムで私が報告したことは 3 つです。

1. 文章作成においては、前提とすべきことが 2 つあります。1 つめは、その文書は何を目的として誰宛に書かれるのか（目的と宛先を明確にする）ということです。2 つめには、自分に同意してくれそうにない人も読み手として想定しているか（内田樹氏の云う「身内の語法」で書かない）ということです。学生に書けるようになってほしいのは、美しい文章でも名文でもありません。伝えたいことをちゃんと伝えることのできる「達意の文章」です。そのために、文章の型やルール、使い分けるべき文体等の知識やスキルの修得は不可欠です。ただ、それも前提が蔑ろにされているは身につきません。



2. 「達意の文章」に求められるは、「一文一義」「メタ言語（メタ・メッセージ）」「パラグラフ・ライティング」の技法です。最近、新井紀子さんの『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』という本が話題になっています。「アミラーゼという酵素はグルコースがつながってできたデンプンを分解するが、同じグルコースからできていても、形が違うセルロースは分解できない。」という文を、子どもたちも含め「某新聞社の論説委員から経産省の官僚まで」が誤読したというデータをあげ、読解力が危機的だと煽っています。でも、これは読解力の問題でしょうか。上記の文が「アミラーゼという酵素は、グルコースがつながってできたデンプンを分解できる。しかし、同じくグルコースからできているセルロースは分解できない。デンプンとセルロースは形が違うためである。」と書かれていても誤読したでしょうか（平田オリザさんや阿部公彦さんたちも同じような批判をされています）。日本語を母語としない人びとが増えている日本において、誤読されにくい文章が書ける能力の修得は喫緊かつ必須のものです。（日本の公立学校に通い、学校から「日本語教育が必要」と判断されたにもかかわらず、指導を受けられていない外国籍児らが全国で 1 万 400 人に上っているという現実もあります。）

3. 論文・レポートを書くプロセスは、広義にとらえた「探究」のプロセスに位置づける必要があります。そして、論文・レポートの作成プロセスである「論述」と対をなす狭義にとらえた「探究」のプロセスこそ、高校段階までにおいて繰り返しトレーニングされるべきです。そのトレーニングのために私が開発したツールが「探究のためのロジカル・フラワー・チャート（Fチャート）」なのですが、今回は時間の都合で詳しく紹介できませんでしたので、別の機会に報告させていただきます。

学部における実践報告

1) 経済学部

経済学部からは、河音琢朗教授より、日本語アカデミック・ライティング教育の現状とその意義についてお話をいただきました。同学部では、初年次に基礎演習でライティングの初歩を教え、「経済学入門」でレポートを課すとともに、それをサポートする「レポート110番」を設けておられます。2年生の前期には「実践経済演習Ⅱ」を2クラス開講し、執筆と書き直しを繰り返すことにより、ライティング能力の定着を図っておられます。提出させたレポートは担当のESが文章診断とループリック評価を行い、受講生同士で相互チェックも行わせておられます。こうして得た第三者からの視点・指摘は、受講生に気づきを与え、彼らが本来持っているライティング能力を引き出すとの示唆がありました。また、教えることでESのライティング能力が成長することも見逃せないという報告もありました。

2) グローバル教養学部

本年度開設されたグローバル教養学部からは、学部事務室の今川新悟氏より、オーストラリア国立大学(ANU)とのデュアル・ディグリー・プログラムの特徴と、ライティング指導の必要性についてお話いただきました。同学部では、初年次の科目数が8つと限られており、学部生はANU科目を受講するに足る学力を養成しなければならないため、アカデミック・スキルズ科目を配置する余地はないとのことですが、学部生のニーズに応じるべく、学修支援を担うアカデミック・アドバイジング・センター(AAC)を設置し、各授業担当教員により意欲的にライティング指導を行っておられます。開設後間もない段階では、専門的なスキルを持つAACのスタッフの設置は難しく、授業内でも学生間の差が大きいことなどから一律的なライティング支援を行うには至っていませんが、今後は全学的なライティング支援体制の構築を視野に、正課と課外との連携を進めていく予定であるとお話いただきました。

3) 国際関係学部

国際関係学部からは、ロバート・オモハン先生より、学生のニーズを受け「自立した書き手を育てる」ことを理念とするライティング・チュートリアルの説明をいただきました。チューターの適切な支援により、レポートの中心的な論点の曖昧さや文法上の問題の解決を図り、自己管理学習を促すとともに、剽窃行為も防ぐことに役立っているとの報告がありました。2019年度春学期は、図書館のオープンスペースで英語チュートリアルと日本語チュートリアルを実施されました。アンケートの結果、利用学生の多くがチュートリアルの経験を肯定的に受け止めているとのこと。チュートリアルの成功には、授業との連携及び教員からの働きかけや、質の高いチューターの育成等が必要ですが、さらに学部単位での予算確保やマネジメントも課題ととらえておられます。

全体討論概要

全体討論では、発表者からの日本語と英語のライティング指導の共通性と、論理的な文章作成に係る高等学校と初年次教育の連携可能性の指摘を受けて、多くの貴重な質問や指摘をいただくことができました。そして、フォーラムとしては、本学における今後のライティング指導の進め方に関して、有意義な論点整理ができたのではないかと考えます。

今後の全学的なライティング指導の進め方においては、まず、その対象に関する検討が必要だとの指摘がありました。アカデミック・ライティングに初めて向き合う初年次生か、卒論執筆を控えた高年次生か、あるいは日本人学生だけか、外国人留学生の日本語学習支援も含めて考えるのかなどです。これは、ライティングのジャンル(学術的な専門性)や日本語のレベル、指導方法にも関わる大きな問題と言わざるを得ませんし、すべてを兼ね備えた授業やセンター



というものも実現は難しいと思われませんが、今後検討すべき課題と考えます。

また、全学的なセンターや共通の授業に集約して進めるべきか、各学部で分担して進めるべきかについても意見の分かれるところです。全学的なライティング・センターを設立したり、共通のアカデミック・ライティングの授業を全学的に開講したりすることは、集中的、集約的に指導を進めることにつながり、一見非常に効率的に見えます。しかし、他大学の事例を見ると、業務負担やコストの増大に見合うだけの全学的な利用率が得られないという事例も報告されています。これは、上記のジャンルによるレポート、論文の書き方や指導方法の違いによるところが大きいと言えます。初年次生のアカデミック・ライティングの基礎的な部分は全学共通で、専門的な部分は各学部で分担する方策の方が、より効率的になるというご意見もいただきました。アメリカでは、“writing across the curriculum” のようにすべての授業でライティング指導を行うという考え方も広まっているようです。

さらに、日本語と英語、全学もしくは高校・大学の連携を進める上で、ライティング指導に係る専門用語の統一や、それを用いて指導を行う人たちの指導方法に関する合意形成も重要な課題として浮上しました。特に、初級のアカデミック・ライティングに限っても、適切な評価課題やその成果であるレポートのサンプルを収集し、レベル分けし、それを評価するためのルーブリックを共同で作成する必要があるでしょう。レベルの異なる利用者を適切に指導するためには、やはりレベルに合った課題や評価方法が必要で、それがなければ、たとえ優秀な TA が指導に当たり、多大な労力をかけてもボトムアップ層のレベルアップにつながらないとの指摘をいただきました。

これらの貴重なご意見を受け、BKC 会場で参加しておられた森岡教学部長からは、本学における今後のライティング指導の進め方に関して、すべてを解決する方策は難しいが、適切な論点整理をしていただき非常に感謝する旨ご発言があり、本フォーラムの一つの大きな役割を果たすことができたのではないかと考えます。

まとめ

今回の教学実践フォーラムは、2 時間 30 分という長時間であったにもかかわらず、106 名の参加者を得て非常に熱心な議論が交わされました。これは、学内外のライティング指導への関心の高さの証左と思われます。500 名近い学生へのアンケートによると、高等学校での日本語のライティング指導は「年 3 回以下」が 39%、事前指導はなく「書けという指示のみ」が 35%、フィードバックは「返却のみ」と「漢字・語句修正のみ」が 38%でした。英語のライティングの経験が「全くなし」の学生が 23%で、事前は「書けという指示のみ」が 35%、フィードバックが「返却のみ」と「文法・綴りの修正のみ」が 53%でした。このように、高等学校で十分なライティング指導が行われていない現状の中で、大学での「学び」を形成するための初年次における指導の重要性は大きいものがあります。2022 年から実施される学習指導要領では「思考力・判断力・表現力等」の育成が重視され、高校においてもライティング能力の強化は必須のものとなってくるでしょう。高大連携の観点からも、大学の初年次で、日本語と英語のライティング指導に関して、その方針やノウハウを共有し、全学的な支援のあり方を模索する必要があると思われます。



立命館大学教育開発推進機構 〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

TEL : 075-465-8304 FAX : 075-465-8318 email : fd71cer@st.ritsumeikan.ac.jp <http://www.ritsumeikan.ac.jp/itl/>

発行日：2019 年 10 月 編集・発行：立命館大学 教育開発推進機構